RittorMusic
An impress Group Company

各　　位

2022 年 7 月 29 日
株式会社リットーミュージック

テレビ特撮黎明期の現場の息吹を伝える貴重なインタビュー集！
『特撮黄金時代 円谷英二を継ぐもの』（八木毅 編）が 8 月 12 日に発売

インプレスグループで音楽関連のメディア事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）内で文芸・カルチャー関連を扱う出版レーベル立東舎は、『特撮黄金時代 円谷英二を継ぐもの』（八木毅 編）を 2022 年 8 月 12 日に発売します。

本書では、『ウルトラ証言録』シリーズの著作で知られる八木毅が円谷英二監督から直接の薫陶を受けた特撮レジェンドへの取材を敢行。「円谷育ち」の著者ならではの親密な雰囲気の中で、昭和の特撮現場のリアルな風景、そして円谷英二監督の実像を詳らかにしていきます。また当時の貴重な現場写真、佐川和夫監督自筆の「インメルマンターン」図解、円谷英二邸の写真、さらに

は著者撮影による特撮所縁の聖地の写真なども掲載し、ビジュアル的にも楽しめる１冊となっています。

あの特別な時代のクリエイティビティを、ぜひ本書で追体験してください。

常識を覆す特撮の現場

「生活感を感じられればお客さんは付いてきます」

八木　ではいよいよ、円谷プロでのことを詳しく伺っていきたいと思います。

佐川　東宝を辞めるころにはチーフになっていて露出をやっていたんだけど、円谷プロに移ったらなにも言わずに、「お前はチーフ」って（笑）。それでオヤジさんに「えー、いいんですか？」って聞いたら、「いいんだよ、映ってれば」ということでね。そのときにキャメラマンとして呼ばれたのが高野（宏一）さんなんだけど、高野さんは共同テレビの報道部でいい線まで行っていたみたいだよ。若いけど報道の上の方にいたんじゃないかな。それはいいんだけど報道の癖がなかなか抜けなくて、セットでも手のひらを出して露出を見るんだよ。報道関係は悠長に露出を測っている余裕がないから、曇っているときの光はどうかなんていうのは手の平で覚えるからね。手の甲は日に焼けるからダメなの。それで「高野さん、それは止めてくださいよ」って言ったんだけど、「俺はこの方が露出は分かるんだよ」ということでね。

八木　高野さんと一緒に写真を撮ったことがありますが、ライカだから露出計は付いていないんですけど「俺は分かるんだよ」とおっしゃっていました。

佐川　曇ったり晴れたり、木の下だったりビルの中だったりと、いろいろな状況があるじゃない。そういうのが体に染み付いているんだよね。今のキャメラはオートだから、暗いところから明るいところに行っても、明るいところから暗いところに行っても追いかけてくれる。でも当時のキャメラは全部人間がやらないといけなかった。だから高野さんとは最初やりにくかったよ。「お前の露出はどうも不安でしょうがない」なんて言われてさ（笑）。

あと高野さんはいち早くテレビのやり方を身につけていたけど、私たちにはまだ映画の名残があったんだよね。東宝のときは体育館上の大きなステージで仕事をやっていたわけでしょう。天井だって10間くらいあるような高さで、二重（キャットウォーク）に人がいても分からないくらいだからね。それがテレビになって小さなスタジオで撮影するわけだから、ハンディキャップはいっぱいあったんだよ。そんな『ウルトラQ』の最初のころの撮影では（変身）、井上泰幸さんがセット美術を作ってくれたのもよく覚えている。

八木　まさに東宝で美術をやられていた方ですね。

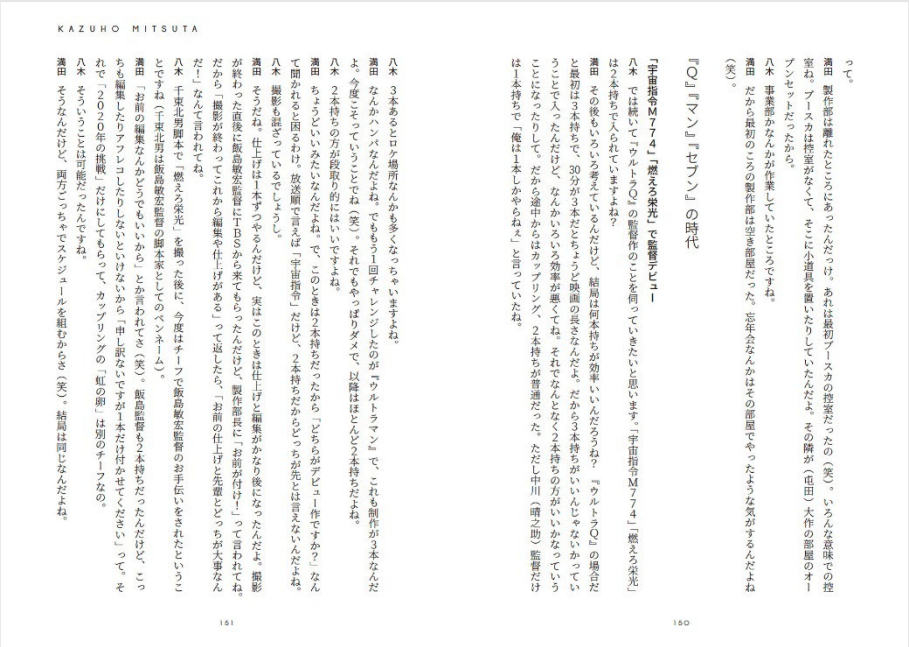
佐川　そうそう、応援で来てくれたわけ。私も高野さんも最初だから本編のロケーションの現場に顔を出していて、特撮のロケハンには井上さんも同行してくれたの。中央道の工事中のトンネルのセットなんだけど、写真も撮ったりしてね。それでセットを見たらびっくり。もう、そっくりそのまんまで写真を横においても違いが分からない。美術ってこんなセットを作るんだっていうのは驚いたね。

八木　クレジットにはお名前がないようですね。

佐川　タイトルに名前は出ていないんじゃない？

八木　本編は梶田興治監督で特撮が川上景司監督ですね。

佐川　東宝の現場のときからすごい人だなとは思っていたけど、やっぱり井上さんってすごいなと思ったよ。ミニチュアをみんな作っているようなものではなく、生活感があってリアルなの。オヤジさんがよく言ってたんだけど、「特撮というのはみんな嘘の写真なんだ。でも嘘の写真を嘘のように撮ったらやっぱり皆さん付いてこないですよ」ということでね。嘘の写真を見てもお客さんが違和感を全然感じない、そういう情景を撮ることができなければお客さんは自然に逃げていきます。これはしょっちゅう言っていたからね。



って。

満田　製作部は離れたところにあったんだっけ。あれは最初プースカの控室だったの（笑）。いろんな意味で控室ね。プースカは控室がなくて、そこに小道具を置いたりしていたんだよ。その隣が（円田）大作の部屋のオープンセットだったから。

八木　事業部かなんかが作業していたところですね。

満田　だから最初のころの製作部は空き部屋だった。忘年会なんかはその部屋でやったような気がするんだよね（笑）。

『Q』『マン』『セブン』の時代

「宇宙指令M774」「燃えろ栄光」で監督デビュー

八木　では続いて『ウルトラQ』の監督作のことを伺っていきたいと思います。「宇宙指令M774」「燃えろ栄光」は2本持ちで入られていますよね？

満田　その後もいろいろ考えているんだけど、結局は何本持ちが効率いいんだろうね？　『ウルトラQ』の場合だと最初は3本持ちで、30分が3本だとちょうど映画の長さなんだよ。だから3本持ちがしいんじゃないかっていうことで入ったんだけど、なんかいろいろ効率が悪くてね。それでなんとなく2本持ちの方がいいかなっていうことになったりして。だから途中からはカップリング、2本持ちが普通だった。ただし中川（晴之助）監督だけは1本持ちで「俺は1本しかやらねぇ」と言っていたね。

八木　3本あるとロケ場所なんかも多くなっちゃいますよね。

満田　なんかハンパなんだよね。でももう1回チャレンジしたのが『ウルトラマン』で、これも制作が3本なんだよ。今度こそっていうことでね（笑）。それでもやっぱりダメで、以降はほとんど2本持ちだよね。

八木　2本持ちの方が段取り的にはいいですよね。

満田　ちょうどいいみたいなんだよね。で、このときは2本持ちだったから「どちらがデビュー作ですか？」なんて聞かれると困るわけ。放送順で言えば「宇宙指令」だけど、2本持ちだからどっちが先とは言えないんだよね。

八木　撮影も混ざっているでしょうし。

満田　そうだね。仕上げは1本ずつやるんだけど、実はこのときは仕上げと編集がかなり後になったんだよ。撮影が終わった直後に飯島敏宏監督にTBSから来てもらったんだけど、製作部長に「お前が付け！」って言われてね。だから「撮影が終わってこれから編集や仕上げがある」って返したら、「お前の仕上げと先輩とどっちが大事なんだ！」なんて言われてね。

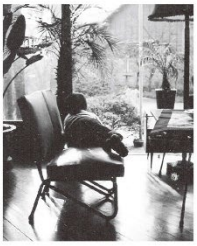
八木　千束北男脚本で「燃えろ栄光」を撮った後に、今度はチーフで飯島敏宏監督のお手伝いをされたということですね（千束北男は飯島敏宏監督の脚本家としてのペンネーム）。

満田　「お前の編集なんかどうでもいいから」とか言われてさ（笑）。飯島監督も2本持ちだったんだけど、こっちも編集したりアフレコしたりしないといけないから「申し訳ないですが1本だけ付かせてください」って。それで「2020年の挑戦」だけにしてもらって、カップリングの「虹の卵」は別のチームなの。

八木　そういうことは可能だったんですね。

満田　そうなんだけど、両方こっちやってスケジュールを組むからさ（笑）。結局は同じなんだよね。

自宅の和室で三味線を奏でる円谷英二監督。一緒にいるのは円谷一夫さん。円谷英二監督は子どもが大好きで、孫のこともとても可愛がられました（円谷一夫氏提供）



円谷英二邸のリビングで寝転ぶ円谷一夫さん。撮影したのは円谷英二監督。この部屋は多くの方に印象を残していますが円谷英二監督ご自身もお気に入りで、この部屋でよく思索に耽られていました（円谷一夫氏提供）

一夫　いやいや、立たないから溺れちゃうの。だからすぐ誰かが助けてくれるんだけど。それで危ないからっていうので、ちょっと浅くしたんだよね。この池に英二さん、一さん、昌弘さん、父と母がボートを浮かべている写真があって嬉かなにかの本に載っていた。僕は写ってないんだけど。

知子　私は棕櫚の木もとても印象に残っています。

一夫　リビングの目の前に4～5本、棕櫚の木が植えられていたんだよね。

「ちょっと行ってくる」と町の電気屋さんへ

八木　円谷英二さんの日常生活はどんな感じでしたか？

知子　だいたい朝の9時になると東宝の撮影所から黒塗りのクルマがお迎えに来ていましたね。それをお見送りしてというのが毎日の日課でした。お戻りはいつも早くて5時か6時ですね。これも黒塗りのクルマでしたけど、撮影なんかがあると会社の人のクルマに乗せてもらって帰ってくることもありました。

一夫　僕が知っているのは、その後で円谷プロで大神さんが英二さんの送り迎えをしていたころですね。アメリカのマーキュリーコメットっていうクルマで、4ドアのセダンでスカイブルーメタリックですごく綺麗だった。そのクルマでは桑さんの運転で僕とおばあちゃんと昌弘さんの4人で大阪万博に行ったことがある。桑さんは先にクルマで東京に戻り、おばあちゃんと昌弘さんと僕は万博を見てから京都に行って新幹線で帰ったのかな。英二さんは三菱未来館の映像を撮ったりしていたのと、太陽の塔の下の造形物を作るのに円谷プロダクションと円谷エンタープライズが携わっていたようなのでわれわれも万博に行くことができたのだと思います。もちろん、英二さんは亡くなっているんだけど、そのとき覚えているのは、万博の関係者の人がおばあちゃんにずっと付き添っている。それは中野さんも言っていたよ。俺は結構いたずら小僧的な立場で、あることはすごくちゃんと受け止めてる一方で、新しい世界での戦いをしたいという思いもあったからね。若いからどうしてもそっちの方に行ったんだけど、佐川さんはすごく忠実に英二さんの言葉を受け止めて実践していたよね。あれはちょっと真似できなかったな。

プロデューサーは俯瞰で物事を見る

「孤独のメス」から「子連れ狼」へ

八木　助手→キャメラマン時代のお話をここまで伺ってきましたが、鈴木さんはそもそもプロデューサー志望だったわけですよね。

鈴木　そうだね。ハリウッドのプロデューサーみたいにあらゆる分野に口を出せるのがプロデューサーだっていう意識がもともと自分にはあったから、じゃあまずはどこから攻めようかと考えた。助監督なのか、制作なのか……でも自分が一番分かるのは撮影だと思ったから、まずはキャメラマンを目指していこうということで動いた。それがまたま特撮だったんだけど、繰り返しになるけど最初が特撮だったのはよかったんだよね。それで特撮を学んで、やっぱり本編もちょっと勉強しておきたいなと思ったらうまく本編の方に流れていけた。『怪奇』の後はリストラで国際放映に放り出されていくわけだけど、一さんはそれも計算づくだった。俺がクビを切られるのは最後だろうと思っていたら、一番目が俺だったんだよね。クビを切っても生きていけるだろうというのが一番目の高野さんだし、俺は『孤独のメス』のキャメラマンに登用するからっていう

八木　鈴木さんでさえ2回ロケハンに行かれていたというのは映像を志す人にとっても有益な情報だと思います。でも円谷英二監督も「できない」と言うのではなく、後で考えればいい」とおっしゃっていたそうです。だから皆さんそうやって作られているわけですよね。

円谷英二の名言

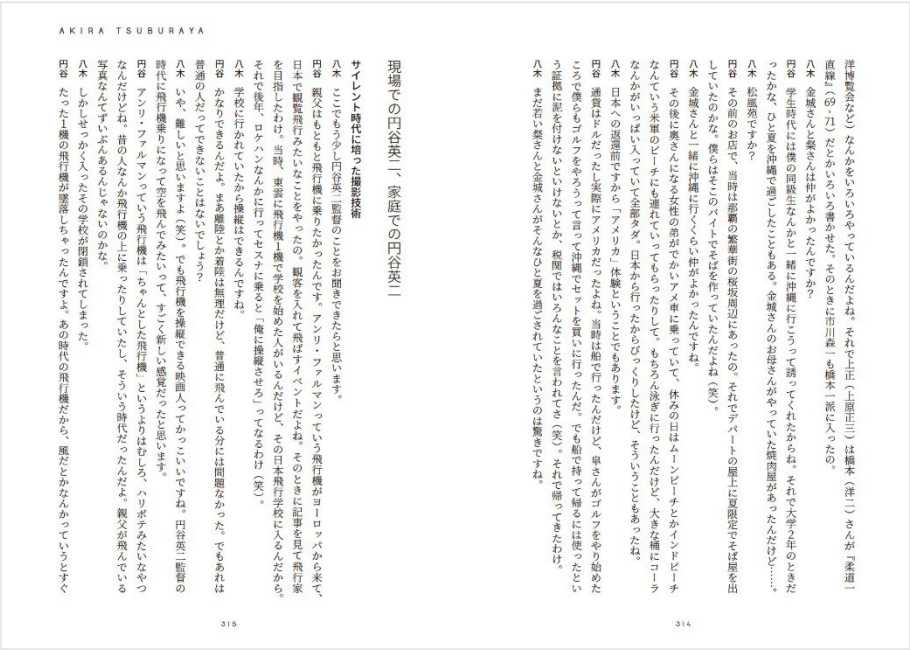
鈴木　英二さんの名言っていくつかあるわけだけど、「寄らば寄れ、引かば引け」というのはよく知られているよね。

八木　これは別に画面サイズの話だけではなく、やるときは中途半端じゃなく思い切りやれということですよね。

鈴木　まさにその通り。あとは「ノーマルで撮れないものはひっくり返せ」とか「観察力を身につけろ」なんていう言葉でいろいろな基本を教わっている。当時はアナログだから「どうやったらこれを画にしていけるか？」ということを常に考えていたわけだよ。だからこそ、「観察力を身につけろ」ということも言われたんだけど、なんでも夢中になって見ていたね。しかも恐ろしいことにその習慣は今でも残っている。夜中に帰路、雨が街灯の光に照らされているのを上から見て「これは宇宙空間を光線が降っていくようなものだな」と思って、「あのときなんでこれが分からなかったんだ！」って後悔したりね（笑）。オイルで粘着力を付ければ長い尾が引くだろうし、たった1つの雨の情景からいろいろな素材が作れたのになって。俺はもうそういう仕事をしているわけではないのに、そんなことを今でもつい考えてしまう。この話はフェイスブックに載せたことがあるんだけど、樋口（真嗣）監督が「まさにこれが特撮！」って絶賛してくれたよ（笑）。

八木　でも本当に「まさにこれが特撮！」ですよね。

鈴木　ただ英二さんの言葉を一番忠実になぞっているのは佐川さんだね。佐川さんは円谷英二の後をちゃんと追



洋博覧会など）なんかをいろいろやっているんだよね。それで上正（上原正三）は橋本（洋二）さんが『柔道一直線』（69・71）だとかいろいろ書かせた。そのときに市川森一も橋本一派に入ったの。

八木　金城さんと榮さんは仲がよかったんですか？

円谷　学生時代には僕の同級生なんかと一緒に沖縄に行こうって誘ってくれたからね。それで大学2年のときだったかな、ひと夏を沖縄で過ごしたこともある。金城さんのお母さんがやっていた焼肉屋があったんだけど……。

八木　松風苑ですか？

円谷　その前のお店で、当時は那覇の繁華街の桜坂周辺にあったの。それでデパートの屋上に夏限定でそば屋を出していたのかな。僕らはそこのバイトでそばを作っていたんだよね（笑）。

八木　金城さんと一緒に沖縄に行くくらい仲がよかったんですね。

円谷　その後に奥さんになる女性の弟がでかいアメ車に乗っていて、休みの日はムーンビーチとかインドビーチなんていう米軍のビーチにも連れていってもらったりして。もちろん泳ぎに行ったんだけど、大きな桶にコーラなんかがいっぱい入っていて全部タダ。日本から行ったからびっくりしたけど、そういうこともあったね。

八木　日本への返還前ですから「アメリカ」体験ということもあります。

円谷　通貨はドルだったし実際にアメリカだったよね。当時は船で行ったんだけど、卓さんがゴルフをやり始めたころで僕らもゴルフをやろうって言って沖縄でセットを買いに行ったんだ。でも船で持って帰るには使ったという証拠に記を付けないといけないとか、税関ではいろんなことを言われてさ（笑）。それで帰ってきたわけ。

八木　まだ若い榮さんと金城さんがそんなひと夏を過ごされていたというのは驚きですね。

現場での円谷英二／家庭での円谷英二

サイレント時代に培った撮影技術

八木　ここでもう少し円谷英二監督のことをお聞きできたらと思います。

円谷　親父はもともと飛行機に乗りたかったんです。アンリ・ファルマンっていう飛行機がヨーロッパから来て、日本で観覧飛行みたいなことをやったの。観客を入れて飛ばすイベントだよね。そのときに記事を見て飛行家を目指したわけ。当時、東雲に飛行機1機で学校を始めた人がいるんだけど、その日本飛行学校に入るんだから。それで後年、ロケハンなんかに行ってセスナに乗ると「俺に操縦させろ」ってなるわけ（笑）。

八木　学校に行かれていたから操縦はできるんですね。

円谷　かなりできるんだよ。まあ離陸とか着陸は無理だけど、普通に飛んでいる分には問題なかった。でもあれは普通の人だってできないことはないでしょう？

八木　いや、難しいと思いますよ（笑）。でも飛行機を操縦できる映画人ってかっこいいですね。円谷英二監督の時代に飛行機乗りになって空を飛んでみたいって、すごく新しい感覚だったと思います。

円谷　アンリ・ファルマンっていう飛行機は「ちゃんとした飛行機」というよりはむしろ、ハリボテみたいなやつなんだけどね。昔の人なんか飛行機の上に乗ったりしていたし、そういう時代だったんだよ。親父が飛んでいる写真なんてずいぶんあるんじゃないのかな。

八木　しかしせっかく入ったその学校が閉鎖されてしまった。

円谷　たった1機の飛行機が墜落しちゃったんですよ。あの時代の飛行機だから、風だとかなんかっていうとすぐ

■書誌情報

書名：特撮黄金時代 円谷英二を継ぐもの

著者：八木毅

定価：2,750 円（本体 2,500 円＋税 10%）

発売：2022 年 8 月 12 日

発行：立東舎／発売：リットーミュージック

商品情報ページ　http://rittorsha.jp/items/20317428.html

CONTENTS

佐川和夫　オヤジさんとは呼んでいるけど師匠でしかないよ
本多隆司　とにかく楽しかった円谷プロの現場
中堀正夫　「すごい特撮」への対抗心
満田かずほ（禾へんに斉）　オヤジさんの「光る眼」を感じる
稲垣涌三　円谷英二さんはいつもすごく楽しそうだった
円谷知子＋円谷一夫　円谷英二の日常生活
　Recipe　円谷英二の愛したカレー
鈴木清　いたずら小僧が継承した円谷英二監督の教え
円谷粲　身近で過ごした「神様」との日々

コラム　思い出の円谷プロ／特撮の夢工場、東宝ビルトのこと／特撮の街、世田谷区の砧とその周辺

PROFILE

八木毅（やぎ・たけし）
早稲田大学シネマ研究会で映画を研究し、卒業後に円谷プロダクションに入社。高野宏一特技監督、満田かずほ（禾へんに斉）監督に師事し監督、特技監督、プロデューサーとなる。代表作に『ウルトラマンマックス』『ULTRASEVEN X』『大決戦！超ウルトラ８兄弟』『ウルトラマンガイア』『ウルトラ Q dark fantasy』『都市伝説セピア』『SD ガンダムフォース』『霊魔の街』など。2007 年に独立して現在はフリー。海外の仕事も多い。著書に『ウルトラマンマックス 15 年目の証言録』『ウルトラマンティガ 25 年目の証言録』『ウルトラマンダイナ 25 年目の証言録』（編）がある。

【立東舎】http://rittorsha.jp/
立東舎は文芸、マンガほか、さまざまな分野のポップカルチャーを紹介する出版活動を展開中。「乙女の本棚」などの好評シリーズのほか、手塚治虫、谷ゆき子らの幻のマンガの復刻などで感度の高い読者の話題を集めている出版ブランドです。

【株式会社リットーミュージック】https://www.rittor-music.co.jp/
『ギター・マガジン』『サウンド＆レコーディング・マガジン』等の楽器演奏や音楽制作を行うプレイヤー＆クリエイター向け専門雑誌、楽器教則本等の出版に加え、電子出版、映像・音源の配信等、音楽関連のメディア＆コンテンツ事業を展開しています。新しく誕生した多目的スペース「御茶ノ水 Rittor Base」の運営のほか、国内最大級の楽器マーケットプレイス『デジマート』やエンタメ情報サイト『耳マン』、T シャツのオンデマンド販売サイト『TOD』等の Web サービスも人気です。

【インプレスグループ】https://www.impressholdings.com/

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】
株式会社リットーミュージック　広報担当
E-mail: pr@rittor-music.co.jp